べし、今田舍などにて、やぶさめ射る笠に風袋あるは、又後三年の繪のツノを結びし紐の、あまりの垂れたるにかたどるなるべし、本とは風袋はあるまじきにや、又云、あやゐ笠は、古へは常に用ひし日でり笠にて、雜具也、古き物語を見て知るべし、今は絶たる物なれば、珍らしき物には成たり、されば、さのみ寸尺法式などはなき物也、藺にてあみ其形古の繪に似たらんは、古にかはらぬ綾藺笠なるべし、むつかしく秘傳などいふ事はあるまじき事也、

〔今昔物語二十五〕平維茂罰藤原諸任語第五

我（平維茂）ハ紺ノ襖ニ欵冬ノ衣ヲ著テ、夏毛ノ行騰ヲ履綾藺笠ヲ著テ、（略）（下）

〔今昔物語二十八〕東人通花山院御門語第卅七

今昔、東ノ人否不知ズシテ、花山院ノ御門ヲ馬ニ乘乍ラ渡ニケリ、（略）（中）院ハ寢殿ノ南面ノ御簾ノ内ニテ御覽ジケルニ、年卅餘許ノ男ノ鬚黑ク鬢クキ吉キガ、顏少シ面長ニテ色白クテ、形チ月々シク、綾藺笠ヲモ著セ乍ラ有ルニ、（略）（下）

〔今昔物語二十九〕攝津國來小屋寺盜鐘語第十七

今昔、攝津ノ國口ノ郡ニ小屋寺ト云フ寺有リ、（略）（中）年卅許ナル男二人、（略）（中）大キナル刀現ニ差シテ、綾藺笠頸ニ懸テ、下衆ナレドモ月々シク輕ビヤカナル出來ヌ、

〔增鏡十四春の別〕すぎしころ、資朝も山伏のまねして、柿の衣にあやは（本作ハ一ぬ）笠といふ物きて、あづまのかたへ、忍びてくだれりしは、すこしはあやしかりし事也、

〔安齋隨筆後編十〕一やぶさめの繪の事　笠の事、古代は常に日でりに著たるあやの笠を用たり、享保の頃、やぶさめ御再興の時、あやの笠の事詳ならずして、南都興福寺の寶藏正倉院へ御尋の時、ふかき田樂笠を上げたりし、此笠ヲ用させられて、やぶさめ御張行ありし、その笠はくゞなはを骨にして、むぎわらをあみつけたる物也、